平成２９年４月１７日　つるつる会

㉛ 埋められた白色五輪塔

平成４年１１月、中国縦貫自動車道建設に当たり賀陽町（現吉備中央町）上竹地内大村遺跡の埋蔵文化財調査が岡山県教育委員会により行われ、中世の宝篋印塔２０数基、五輪塔３００余基が発掘されました。

大村寺境内に安置された発掘五輪石群

そしてこれらは、自然に埋したものでなくて人の手によって行われており、原石はどうやら備中町（現高梁市備中町）平川産のものと考えられるに至っています。何故このようなことになったのでしょう。

平川（備中国川上郡穴門郷本郷）は、室町時代初めの建武３年（１３３６）、近江国から平川掃部介高親が領家職として入国し、自分の姓をもって地名を平川とした所です。高親は、この地域特産の白色石灰石に目を付け、生国の近江国「石搭寺」の例にならい、今風に言う「むらおこし事業」として五輪塔の生産に取り組みました。

平川の白色石灰石採掘場跡

しかし、これらの需要は上級武士に限られていたものですから、最初からうまくいったわけではありません。

しかし、群雄割拠・下克上という戦乱の時代に入りますと、戦死者の増加と共に、白色の五輪塔は、その荘厳な美しさから地方豪族の求めにより大量に生産されてゆきました。

採石地は、平川下郷立岩地内の山中にあり、今は木々に沈み込んでいますが、よく見ると切り立った岩にノミの跡や、一面苔に覆われた原石が散在していることがわかります。

これらは、平川氏の菩提寺である観音寺で加工され、成羽川沿いの川港、数の瀬、井川で船積みされ高梁川、小田川伝いに備中、備後の地に出荷され室町時代の末期には最盛期を迎えました。

しかし、慶長５年の天下分け目の関ヶ原の合戦は、白色五輪塔の命運を大きく左右することになるのです。合戦の翌年、敗戦国となってしまった備中では、徳川方からあらぬ疑いをかけられぬため、朝鮮や関ヶ原へ出征したことはもちろん、武士であったことを象徴する五輪塔、宝篋印塔はほとんど埋められたと言われます。

数の瀬にある積み残しと伝わる五輪石

この合戦を境に白色五輪塔は造立はもちろん、生産も一切が停止してしまったのです。今

も、数の瀬、井川には積み残しと伝わる五輪石が当時のまま、祀るように並べられています。

久田阿弥陀堂跡の五輪石

さて、岡山県教育委員会の調査により、この大井近辺に室町時代から安土桃山時代に建てられた土豪の館や城郭が多数確認されています。

そのひとつ鍛冶山城は、羽柴秀吉の先鋒、備前の宇喜多氏と安芸の毛利氏が争奪戦を繰り返し、天正１０年（１５６７）から宇喜多氏の家臣延原氏が城主となります。

ところが、慶長５年（１６００）関ヶ原の戦いで西軍が敗れ、延原氏は備前東南部へ落ち延びたと伝わります。城郭、合戦と言えば城主一人の名で語られますが、これらは家臣あってのもので、延原氏は当然大井近辺に家臣団を持っていたはずで、その幾人かは、近辺の城館の主であったかも知れません。

瓦製の祠と白色五輪石出現

彼等の中には、命からがら関ヶ原から退散した者もいたことでしょう。落武者の探索をおそれ戦々恐々と過ごす彼等が、「五輪塔のある家はにらまれる。」という風聞に伝来の五輪塔を埋めた者がいても不思議はなかったでしょう。

さて、例の久田の谷奥の阿弥陀堂跡ですが、果たして境内の偶から白石五輪塔が出てきました。持ち主は、寺の裏山に館を構えていた名も知れぬ土豪ではないでしょうか。そして彼は、その生死は不明ですが関ヶ原の合戦に参加していたのではないか。いや、そうあってほしいところです。そのような折柄偶然、宮山の裾に隠すように置かれた白色五輪塔と宝篋印塔を発見しました。室町時代に宮山へ居館を構えていた土豪のものかもしれません。しかし、墓地の荒削りな様子や、宝篋印塔の塔身が五輪塔の地輪の上へ重ねられるなど、どこぞからあわただしく避難された様子も感じられます。

久田の阿弥陀堂跡

大井宮山西麓の五輪石･宝筐印塔

以上、何かしら昨年の「埋められた忠魂碑」のお話しに似ていると思いませんか。歴史は繰り返す。次は、果たして何が埋められる？

（昭和５８年 川瀬潔著「備中の白色五輪塔」、平成１８年 柴村哲三著「備中秘史、埋められた白色五輪搭群」、平川の歴史を語る会代表江草正光さんの著書「ふるさと平川歴史探訪」並びにお話し、足守公民館主催講座「地域の魅力再発見」鍛冶山城主信原氏を学ぶ（草野由之講師作成）を参考としました。）